暑い夏でした！ 今年の中秋の名月 9月29日(金)

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.396**

2023（令和5）年8月15日（火）終戦（敗戦）の日

■ **はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法９条を守り、永久に「戦争をしない国・日本」であることを願い、「鈴木安蔵の出身地の九条の会」を誇りに活動する自由な市民の会です。支持政党や宗教を問わず、何の拘束もなく、匿名でも入会できます。■結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に361名。 ■会費は年千円。隔月で会報を発行しています。

◀本会のシール：デザイン 朝倉悠三さん　■ご入会申し込みは事務局員へ！

「来年9月の自分の総裁任期中に“改憲”を成し遂げる」

岸田文雄首相はこう公言していますが、まさにこの1年間が改憲を許さない正念場です。「物事はひとりから始まる」と言いますが、私たち一人ひとりのちょっとの勇気で改憲を阻止しましょう。ノーベル平和賞を受賞し、外圧頼みで日本の政治を変えましょう。署名活動にお力をお貸しください。

『憲法9条にノーベル平和賞』の署名を！

ロシアによるウクライナ侵略をはじめ世界にいまだ戦禍が絶えることがなく、日本も軍備増強に向かっている今だからこそ、戦争放棄を誓った日本国憲法第9条を世界中に訴え広める時です。

「憲法9条にノーベル平和賞を」の署名活動は2013年から行われてきましたが、今年2023年度は「安保法制意見訴訟全国ネットワーク」と「9条改憲NO!全国市民アクション」を受賞対象として推薦し、ノルウェーのノーベル委員会宛に署名を届ける活動を行っています。

日本中の多くの平和団体、福島県九条の会、そして「**はらまち九条の会**」も例年この署名活動に取り組んできましたが、今年も署名活動を行います。連絡が遅くなり恐縮ですが、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

＜署名提出の方法＞

同封の「署名用紙」に署名（1名でもよい、住所は「福島県」から記入）を集め、

①実行委員会の「〒252－8799　神奈川県座間市相模が丘1－36－34　座間郵便局留め　落合正行」宛てに、**9月29日必着で**郵送してください。

②あるいは、このQRコードでスマホから送信する。

締切り日が「9月29日（金）必着」と迫っていて大変恐縮ですが、無理のない程度でよろしくお願いいたします。

No.396

ウクライナに一日も早い“終戦の日”を・

●1945年8月15日は、日本がポツダム宣言を受諾し終戦を迎えた日です。78年前のその日の原町の様子や、本会会員さんの体験を『九条はらまち』などから抜き書きしてみました。<ホームページで閲覧できます>
一日も早くウクライナにも“終戦・平和な日”が訪れますように・・・

▲1945年8月15日正午、終戦を伝える天皇の肉声の放送「玉音放送」を聞く人々。

町の通りの明るさに“終戦”を実感

原町区　菅野清二さん

昭和20年の時、私は原町国民学校の3年生。8月9・10日の原町空襲で、現原町一中の近くの自宅で本当に恐ろしい体験をし、鋭利な爆弾の破片を拾い大切に持っています。

すぐに家族で石神の信田沢に避難し、夜に鹿島の上真野の知人でもない家に強引に頼み込んで、窓ぎわに片屋根をかけて地面にゴザを敷いて寝た。15日の終戦はそこで知った。

15日の午後リヤカーを押しながら一気に10キロ以上を歩いて原町に戻った。すでに夜になっていたのにどうだろう。町が明るいのだ。灯火管制で光一筋見えなかった真っ暗な町の通りが、家からこぼれ出る光で明るいのだ。私はその時、「ああ本当に戦争は終わったんだ。死ぬようなこわさはもうないんだ」としみじみ思い、嬉しさで遠路を歩いた疲れも忘れてしまったのだった。　（『九条はらまち』No.38）

◆　◆

ラジオ放送で母は「戦争は終わった」と

原町区　若松丈太郎さん

どのような知らせを受けたかについての記憶はないが、母とわたしはラジオのまえに座った。聞いた場所は自宅居間。ラジオは茶箪笥のうえに置かれていた。父は徴兵されて、不在。妹たちがどうしていたかのかは不明。放送が終わると、母は即座に「戦争は終わった」と言った。　（『九条はらまち』No.143）

相馬農蚕学校では　玉音放送に一同涙を流す

「八月十五日、報国農場作業。正午、作業の生徒二、三十名と共に大亀さん宅に至り、玉音放送を聴く。無条件降伏の聖断下る。一同涕泣して首を垂る。午後、虚脱感の為実習不能也。寄宿に帰ってみたら松根油作りに派遣されていた海軍さんが居なくなっていた。彼等の食糧費は不払いで、余の負担する所となった。」（相馬農蚕学校（現相馬農業高校）門馬太教諭の日記、二上英朗著『原町空襲の記録』）

◆　◆

相馬商業学校長は「負けたんだな」と思う

終戦の日は学校近くの宮井菓子店さん宅で玉音放送を聞いた。教頭ほか鈴木健次郎、高田豊記などの教員が一緒であった。内容はよくわからなかったが、「負けたんだな」と思いました。翌16日でしたか、陸軍の飛行機が「仇を討たなければならない」というふうなビラをまきました。（相馬商業学校（現原町高校）鈴木勝利校長のお話、『原高ものがたり80』）

◆　◆

広島で印刷物で敗戦を知る

小高区　遠藤昌弘さん

20歳の時、8月6日広島の陸軍病院で入院中に被爆し、「黒い雨」にうたれた。

8月15日、私たち入院者は広島の第二陸軍病院三滝分院から横川駅まで歩きました。その途中、電柱に「本日正午、重大放送あり」という貼紙を何度も見て、「何の放送なんだろう」と考えました。横川駅から汽車に乗り、広島駅を通って芸備線の三、四つ目の山の中の駅に降ろされました。小学校の講堂で初めて、青い謄写インクの印刷物で日本の敗戦、終戦を知りました。10月20日に小高町に帰る。

やがて昭和22年平和の日本国憲法が制定された時、「ああ、もう戦争で死ななくてもいいんだ」と心から思いました。

（『九条はらまち』No.31、No.218、No.224）